

事項	大豆「おおすず」のちりめんじわ粒の発生要因とその対策		
ねらい	「おおすず」は加工適性に優れ、青森県の基幹品種として広く栽培されている。しかし、作付面積の増加に伴い、障害粒混入による落等が増え、しわ粒の発生もその要因となっている。そこで、「おおすず」のちりめんじわ粒の発生要因とその防止対策を検討したので参考に供する。		
指導参考内容	<p>1 大豆「おおすず」のちりめんじわ粒発生要因</p> <p>(1) 成熟途中での老化の早まる現象で、立枯れ症状を呈し、成熟期が早まり、百粒重が軽くなる株で多発する。また、ちりめんじわ粒の発生に対して最も影響が大きい時期は、子実肥大終期から黄葉期である。</p> <p>(2) 子実肥大期の湿害で増加する。 子実肥大期の湛水による水分ストレスが、結実期間を短縮させたり、黒根腐病を発生させ、粒肥大を阻害する</p> <p>(3) 子実肥大期の干ばつで増加する。 子実肥大期の高湿乾燥などによる水分ストレスが、結実期間を短縮させ、粒肥大を阻害する。</p> <p>2 「おおすず」のちりめんじわ粒を防止するための総合的な対策</p> <p>(1) 圃場の過湿条件を改善するため、圃場の集団化、明きょ設置、心土破碎や弾丸暗きょ等で排水を促進する。</p> <p>(2) 黒根腐病等立枯性病害を防止するため、連作を避ける。</p> <p>(3) 根域圏を拡げるために、有機質や改良資材の投入による土壌改良や深耕を行う。</p>		
期待される効果	大豆の検査等級を向上させ、高品質安定生産に寄与する。		
利用上の注意事項	<p>1 圃場条件により発生要因が異なるのでその要因に合わせた対策を講ずる。</p> <p>2 成熟期後の乾燥過程で発生する「亀甲じわ」とは異なるので注意する。</p>		
担当部署 (担当者名)	青森県農林総合研究センター 水田利用部 (西澤登志樹、工藤忠之)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成17～19年度 青森県農林総合研究センター試験成績概要集		



写真 ちりめんじわ粒

【根拠となった主要な試験結果】

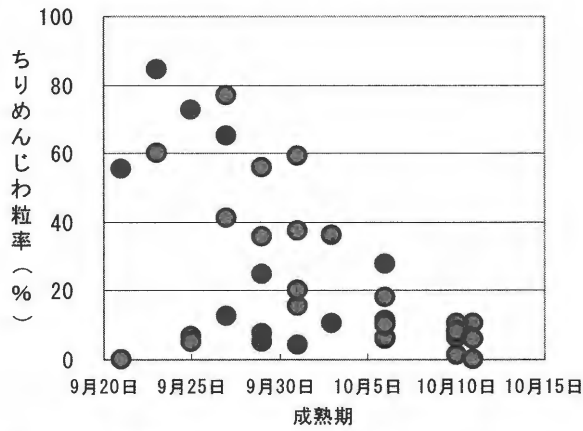


図1 成熟期とちりめんじわ粒率（ホット試験）
（平成18年 青森農林総研）

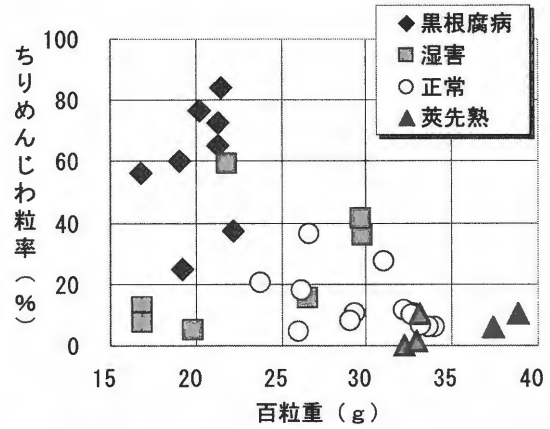


図2 生育障害と百粒重、ちりめんじわ粒率
（ホット試験）（平成18年 青森農林総研）

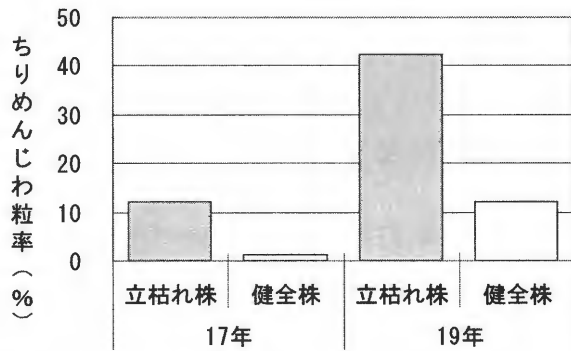


図3 立枯れとちりめんじわ粒率
（平成17、19年 青森農林総研）
（注）立枯れ株：成熟期に下垂した葉が付き、引っぱると簡単に抜ける株

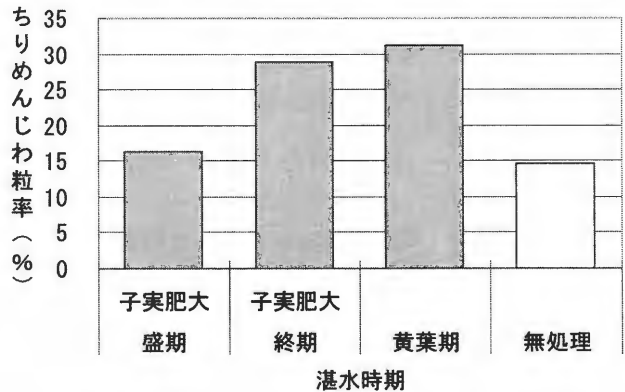


図4 湛水時期とちりめんじわ粒率（ホット試験）
（平成18年 青森農林総研）
（注）湛水条件：3日間ホット地際まで湛水

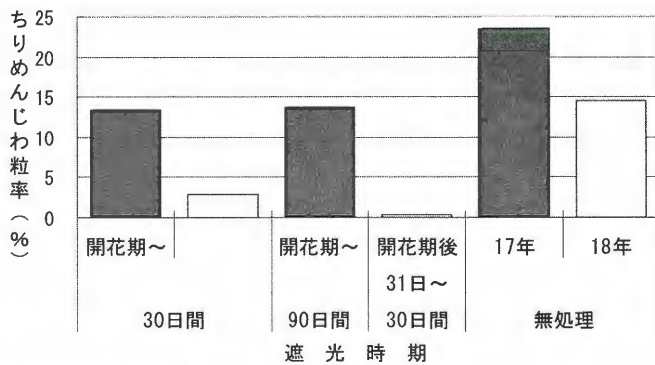


図5 遮光時期とちりめんじわ粒率（ホット試験）
（平成17～18年 青森農林総研）
（注）遮光条件：透過率70%寒冷紗で直射を遮光。
8月最高気温の平均（℃）：
遮光 平成17年 30.7、平成18年 29.6
無処理 " 32.9、" 33.5

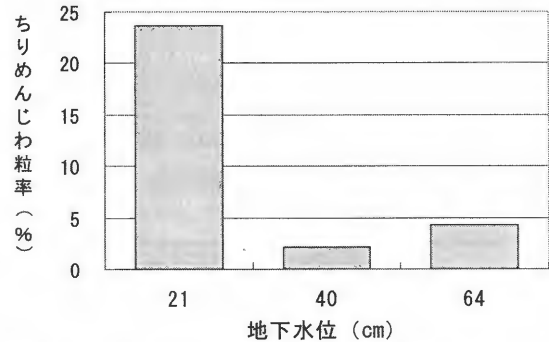


図6 地下水位とちりめんじわ粒率
（平成19年 青森農林総研）
（注）地下水位：地下水位制御圃場で9日間の降雨日を除いた7月13日から8月31日の平均地下水位。
降水量0が6日間続いた8月3日の土壌水分（%）
21cm区 26.6、40cm区 16.9、64cm区 11.6